

## 不登校児童生徒に対する集団療法の効果に関する研究

—児童相談所での実践を通して—

小石亜希子

## 問題

不登校児童生徒に対する、集団療法的アプローチ（グループ活動）は、様々な機関で多く行われており、その効果的なメンバー構成、時間設定などのプログラムも提言されている。しかし、児童相談所などの公的機関での活動は、制約も多く、理想的といわれる活動を行うことは困難である。例えば、メンバー構成に関して、同じ年代のメンバーで構成されるグループが好ましいとされているが、公的機関では、その場所柄故、メンバーを厳密に選択することは困難である。また、児童相談所などではかなり多くのグループ活動が行われているが、報告は少なく、公的機関ならではの効果的なプログラムの提言もほとんどされていないといった問題点も存在する。

## 目的

メンバー構成などの点で、理想的なプログラムで進めることができない、児童相談所などの公的機関におけるグループ活動においても、他のグループ活動同様の好ましい変化を期待できるのか。一児童相談所で実際に実行してきた活動を事例検討し、その効果、意義、改善点を論じる。その際、メンバーの変化のみでなく、スタッフの印象、認知、評価もどのように変化していくかという観点からも検討し、今後このような機関でグループ活動を行うにあたっては、どのようなプログラムを作成すべきか、その効果的なプログラムを提言することをその目的とする。

## 方法

## 対象児童生徒

対象児童生徒の概要は、次の通り。

表1 対象児童生徒

メンバ	性別	平成8年10月現在の学年	不登校発症時期	グループ参加までの経過年	不登校の主な原因
A	男	中2	H.7.5.	0:2	いじめ・起立性調節障害
B	女	小5	不明*		対人関係（馴染めない・緘黙傾向）
C	女	中2	H.8.9	0:2	友人関係（いじめ）

D	女	中2	H.7.7	1:4*	友人関係（肥満に対するいじめ）
E	男	小5*	H.6.4	3:0	母子分離不安

※1 小学校入学時より、ずっと不登校傾向。

※2 グループ参加前から、他の施設の不登校外来相談に通う。

※3 グループ活動参加時は、小6。また、児相初来所は小3。個別指導対象児。

## 対象スタッフ

対象スタッフの概要は、次の通り。

表2 対象スタッフ

スタッフ	性別	年齢	職名	備考
H	男	48	心理判定員	断続的参加（係長）
Y	男	37	"	
S	女	29	"	H.9.9より参加
M	女	24	"（嘱託）	H.9.5より参加（看護婦）
筆者	女	24	"（嘱託）	

以上のメンバー、スタッフで構成されたグループ活動について、以下の手続き用いて研究が進められた。

## メンバーの変化

メンバーの変化は、「毎セッションごとの活動記録」「各メンバーのケース記録」を、参考にし、平成8年10月から平成9年10月までのグループ活動について、ヤロムの集団療法の療法的因子より検討をした。

## スタッフのメンバーに対する印象、認知、評価の変化

スタッフのメンバーに対する印象、認知、評価の変化を捉えるため、「スタッフに対する質問紙」「スタッフに対する面接」をもとに、スタッフのメンバーに対する印象、認知、評価の変化、および各メンバーの各スタッフに対する開放性の変化を、山本・越智（1965）の治療関係スケールを参考にしながら、検討した。

## 結果

## メンバーの変化

平成8年10月から平成9年10月までの1年間の活動を通じ、5人中4人が、形の違いはあれ、学校に行けるようになり、残りの一人も修学旅行には参加し、卒業後の進路を自ら決定できるようになっていた。また、家庭で

の父親や母親との関係が良くなったメンバーも何人かいだ。一方、ヤーロムの療法的因子より、グループ活動内のメンバーの様子を捉えた場合には、活動そのものによる“カタルシス”がもっとも多く見られ、その他の療法的因子も現れていた。

#### スタッフのメンバーに対する印象、認知、評価の変化

全体的に、各スタッフの各メンバーに対する印象、認知、評価は、好ましい方向に変化した。しかし、スタッフによっては、一部のメンバーに対する印象、認知、評価が好ましくない方向に変化したものもいた。また、越智・山本（1965）の治療関係スケールを参考にした際、全てのスタッフが同じ程度メンバーを理解しているケースもあれば、スタッフによってメンバーに対する理解のあり方、程度が著しく異なるケースもあった。一方、メンバーのスタッフに対する開放性も同様で、全てのスタッフに同じ程度の開放性を示すメンバーもいれば、スタッフによって開放性の程度を著しく変えるメンバーもいた。

#### まとめと考察

メンバー構成などの点で、理想的とは言い難い、本グループ活動においても、かなりの効果を得ることができたと思われる。すなわち、程度の差はある、全てのメンバーが、他のメンバーやスタッフとの関わりを通して、対人関係の取り方を体得し、自信をつけることによって、家庭や学校での対人関係を改善していった。加えて、メンバー達は、同じ年代で構成されたグループでの活動では得られない貴重な体験を数多くしていった。しかし、一方で、ヤーロムの療法的因子からグループを捉えた場合、カタルシスが多くなり、言葉を通じて悩みを分かち

合うというグループカウンセリング的な要素はあまり期待できなかった。

スタッフに関しては、全体的にメンバーに対する印象、認知、評価は好ましく変化したが、スタッフによって、あるいはメンバーによって理解の程度や開放性が異なる場合もあった。また、特定のスタッフと特定のメンバーが親密になるあまり、他スタッフとの関わりが希薄になってしまうメンバーの存在や、全てのスタッフが指導的に関わるあまり、グループに参加しづらくなったメンバーの存在も明らかになった。そして、これらはスタッフ間の連絡がうまくできていなかったことが原因と考えられた。

その他、前思春期の児童を優先するあまり、思春期の生徒の意見が聞き入れられにくい傾向があるなどの問題点も見られた。

これらの効果点、問題点を考慮し、児童相談所のような公的機関でより効果的なグループ活動を行うためのプログラムとして、次のようなプログラムを提言する。

1. 活動時間…午前午後にわたる活動は、幅広い活動を行うためにも効果的。
2. 活動内容…偏りのないよう考慮。また、課外活動も組み入れるのが効果的。
3. 対象児童生徒…5～6人程度がまとまりやすい。また同年代を複数参加させるのが好ましい。
4. 参加スタッフ…スタッフの性別、年齢が片寄らないよう考慮する。
5. スタッフミーティング…スタッフ間の葛藤に気づくためにも短時間でも正式な形で行う。